古代タミルの塩の道*

高橋　孝信

1. はじめに

インド亜大陸の南端部には、今日インド政府によって、インドの雅語サンスクリットとならんでインドの二大古典語のひとつとされるタミル語で記された、サンガム文学と呼び慣わされる紀元前後に遡る古代文学（中心部分は紀元後１～３世紀ごろ）が残されている[(1)]。そこには、製塩の様子や塩商人の様子、ことに、塩商人が隊商をなして塩を運ぶ様子を描く作品が少なからず存在する。このような塩を運ぶ隊商の存在は、タミル古代に「塩の道」とでも呼べるものが存在していたことを示唆している。では、塩はどこで作られ、どこへどのようなルートで運ばれたのであろうか[(2)]。本稿では、サンガム文学を拠り所にそれを探ってみたい。

しかし、この問いに答えるのは決して容易ではない。というのも、第一に、サンガム文学では王や族長を称えるためにその町を描く場合以外には、ある事象と固有の都市や町を結びつけて描く作品はほとんどないからである[(3)]。つぎに、サンガム文学はさまざまな約束事の上に成り立った、いわゆる「様式化」された文学であるから、そこに描かれた内容がそのまま実際の社会を映し出しているとは限らないからである。他方、古代タミル人は、タミル人の土地を山地（クリンジ kuṟiñci）、海岸（ネイダル neytal）、森林・牧地（ムッライ mullai）、田園（マルダム marutam）、荒地（パーライ pālai）の５つからなると考えており、サンガム文学でもそれら５つの地域は文学上の約束事の中心をなしており[(4)]、作品に描きこまれたそれらの地域を注意深く分析することによって、本稿の問いへの手がかりを得ることができる。

なお、ここでタミル地域と呼ぶものは、今日のタミルナードゥとケーララの両州に相当する地域である。というのも、今日のケーララ州の公用語であるマラヤーラム語は、10 世紀ごろからタミル語の西域方言をもとに次第に発達して独立の言語となったものであり、それ以前にはケーララ地域はタミル文化圏に含まれていたからである。

以下に引用する作品の概略およびその略号については、文末の略号表を参照されたい。

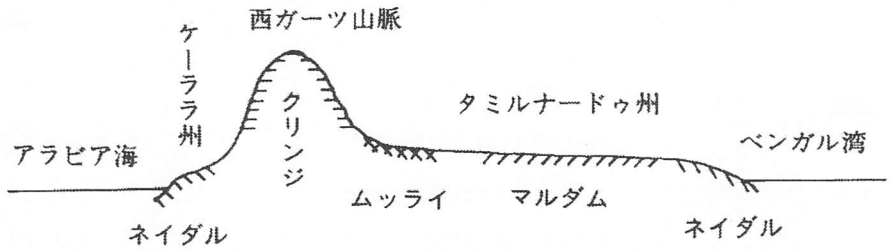
2. タミル古代の５つの地域

本稿でも、先に述べた５つの土地の概略を知っておくことは作品の理解のうえで重要である。つぎの作品は、富を求めて旅に出た恋人を思い、女が寂しさから詠ったものである。

　　塩商人たちが隊をなして通り過ぎてゆく傍らの広漠たる場所に、
　　荒れ果てた村のような、オーマイ樹の大きな荒れた林がある。
　それがひどいものだと言うけれど、偉大な人よ！
　［それなら連合いが居ずに］一人暮らす者にとって、
　その家は快適だとでも言うのでしょうか。（*Kur.* 124）

この作品では荒地（パーライ）の様子がわずかに言及されるが、個々の作品が描く５つの土地のおのおのの様子を総合的に判断し、それらに相当すると思われる部分を実際の地勢と合わせて示すと下

〈北緯10度あたりで半島を東西に切った図〉



注:パーライは固有の土地でなく、ムッライ
などの乾期の姿といわれる。

の図のようになる。

ただし、これは古代の詩人たちが実際にこれらの地域に立ってその景観を描写したというのではなく、5つの土地のそれぞれの原風景とでもいうものがその付近に見られるということである。

たとえば、森林・牧地（ムッライ）を描く作品、すなわちムッライ・ジャンルの作品の多くは、夕方に牧人が牛や羊とともに帰路につく様子を描くが、その夕方は「太陽は、その猛威を鎮め山に沈み、そして苦しみとともにもの哀しい夕刻が始まる」（*Kur.* 195）というように、山に沈む太陽とともに描かれる。この「山に沈む太陽」というのはほとんど定型句であるから（*Nar.* 95, *Ak.* 20, 47 など多数）、東側から西ガーツ山脈を見ていることが分かる。また、ムッライは「蜜蜂の群がる山地に沿った」（*Ak.* 94）地であるから、西ガーツ山脈の山麓部分から平坦部にかけての地域と考えてよい。すなわち、今日のマドゥライ、ティルチラパッリ、コインバトール郊外からガーツにかけての地域をイメージしてもよい[(5)]。この考え方はムッライの地の牧人を表わす iṭaiyar の民間語源説にも表れていて、人々はそれを山地と平坦部分の中間（iṭai）に住む人々（-ar）と考えている[(6)]。

同様に、田園（マルダム）とされる地域もある程度同定できる。それは、マルダム・ジャンルの作品の多くが、大きな町の郊外に水田地帯が広がり、その町の近くには河が流れていることを描いているからである。したがって、ヴァイハイ河畔の古代パーンディヤ朝の都マドゥライや、カーヴェーリ河畔のチョーラ朝の都ウライユール、それにチェーラ朝の首府カルヴール（今日のカルール）などの都市やその近郊の田園地帯と考えればよいであろう。実際、サンガム文学のなかではやや成立が遅いが、宗教詩『パリパーダル』（*Paripāṭal*）[(7)] の第8詩（130行）では、マドゥライの南西のムルガン神の聖地ティルパラングンラムから田園地帯を抜けてマドゥライの中心を流れるヴァイハイ河に至る様子が描かれている。

なお、これらの都市のうち、古来タミル文化の中心地とされ、宮廷学術院サンガムもあったとされるマドゥライが、サンガム文学の成立に大きな役割を果たしたのは疑うべくもない。これに関して興味深いのは、kīḻ という語は「下」と「東」を、mēl は「上」と「西」とを表すことである[(8)]。これらは、それらの古都から見ると東側は徐々に低くなってコロマンデル海岸に達するのに対し、西側は徐々に高度を増し西ガーツに至ることを反映していると思われる。

では、本稿で重要な役割を果たす海岸地域（ネイダル）も特定できないだろうか。ネイダル・ジャンルの多くの作品に描かれる深い入り江は、アラビア海に面した西海岸部のケーララ地方に多く見られるし、海辺と山地が近く（例 *Kur.* 125）、海辺の民が山地の人の歌を歌ったり、両者の間に物々交

換があることも（*Porunarāṟṟuppaṭai* 214-219）[9]、ケーララ側の海岸をモデルにしているように思われる。西海岸がネイダルのモデルであることは用語法にも現れている。ネイダル・ジャンルに固有の時刻は、詩論によると黄昏時（eṟpāṭu）であるが、これは太陽（el）が水平線または地平線に横たわる（paṭu）[10]ことを意味する語である。理論的には日が沈むことも日の出をも意味することになるが[11]、サンガム文学では日が沈むという用例しかない（中世になると「日の出」の用例も出るが、これはおそらく詩人が衒学的な解釈をしたのであろう）。したがって、詩人たちにとってネイダルの夕暮れ時の原風景ともいうべきものもケーララ地方の海岸であると言えるであろう。

ただし、これはあくまで原風景であって、実際には東海岸から西を見ることをはっきり描くネイダルの作品もあるし（*Kur.* 125）、後に見るように東海岸を描く作品も存在する。

そこで、これらのことも念頭に置きつつ、以下ではサンガム文学での製塩の方法、塩の産地についてみて行こう。

3. 製塩の方法

塩は、大別すると、岩塩、地下から得られる天然の鹹水（かんすい）、海水などから得られる。このうち、インドでは、北インドことにヒマラヤ山麓近く以外では、岩塩は産出されない。サンガム文学には岩塩ともとれる kal uppu（石ー塩）という表現が 4 ヶ所出るが[12]、これらのすべてに、海塩を形容する代表的な語「白い（veṇ）」という形容語がついていることを別としても[13]、これらは遠く北インドに産する「岩塩」ではなく、下の *Nar.* 354 でも見られるような、石のような塊になった塩であろう。というのも、近年まで世界でもっとも良質のサファイアを産したのはインド北端のカシミールであるが、そのような付加価値の高い品ならいざ知らず、付加価値の低い岩塩を、紀元後 1 ～ 2 世紀に、北インドから 2000 キロ以上離れた南インドまで運んだとは、到底考えられないからである[14]。ちなみに、古代南インドで、サファイアがよく知られていたことは、「青」を形容するのに「サファイアのように青い」という表現が多数出ることから明らかである。

つぎに鹹水であるが、サンガム文学にも何度か出る。*Nar.* 84 では、荒地（パーライ）に鹹水が吹き出ていると述べる。そのような鹹水が料理に用いられることもあったようであるが（*Perumpāṇ āṟṟuppaṭai* 98-100）、決して良質の塩ではなさそうである。それでも、貧しさの象徴である、塩も使えない料理よりはましであったろう。むしろ、鹹水を含んだ土は洗濯女と結び付けて描かれる。というのも、そのような土は、洗濯物を漂白するのに必要なアルカリ分を含む、いわゆるフーラー土であるからである。*Ak.* 89 では、洗濯女が塩分を含んだ土のある荒地でフーラー土を選り分けることを述べ、*Pur.* 311 では、塩土でできた井戸に、洗濯女が毎日浸して洗っている、清潔な白い衣を戦士が着ていることを描いている。

しかし、本稿で考察する古代南インドでの塩は、ほぼすべてが海塩である。海塩の製塩法には、海岸の塩田に砂や灰などをまき、海水を導いて塩分を付着させたものを集め、それに水をそそいだ濃い原水（滷水（ろすい））を平らで大きい鍋で煮て水分を蒸発させ塩を作る蒸煎製塩と、塩田に海水を導入し、それを天日によって海水溜、蒸発池、結晶池へと濃度をあげて塩を結晶させる天日製塩とがある。前者は燃料を使う分、天日製塩にくらべて経費がかさむ。この生産コストという観点は、古代においても、おそらく非常に重要であったと思われる。

サンガム文学では蒸煎製塩については記述が見つからないが、天日製塩を描く作品はいくつか存在する。たとえば *Nar.* 354 では、白い砂浜と、その一画にある、オウギヤシの葉で作られたフェンス

で囲われた家々などを描写した後、

強烈な太陽の熱で煮立たせ、石塊状になった塩を運び
塩商人たちが長い道のりを列をなして行こうとする。

と言う。また *Nar.* 254 では塩田および製塩の様子を、

まっすぐな場所にある小さな［塩］田に［引いた海］水を変えて、
雨を必要としない耕作をする。

と描写する。ここで塩田での天日製塩を「雨を必要としない耕作」と言うが、製塩業を水田耕作のアナロジーとして描く作品は少なくない。たとえば、*Kur.* 269 では、女は男につぎのように言う。

恐ろしい鮫によって受けた傷も癒え、
私の父は青色の広大な海に出かけて行ったし、
母は塩を売って米を得るために[15]塩の育つ［塩］田（kaḷaṇi）に行った

だから、今なら会えるから来てほしいと言うのである。なお、この kaḷaṇi とは水田を表す語である[16]。

4. 塩の産地

では、塩の産地はどこなのであろうか。すでに述べたように、個々の作品は地名を挙げないし、全体の描写からも、たとえばそれが西海岸なのか東海岸なのかはっきりと知ることはできない。しかし、塩田が東海岸に存在していたことを明らかに描く作品がひとつある。それは「十の長詩」のひとつ *Maturaikkāñci*（『マドゥライ詠嘆』）である。その 111 ～ 118 行を見てみよう。

猛り狂った鮫の泳ぎ回る、青臭い広大な海の、
その海辺の砂浜は月のように白い。
そこの太鼓のような幹のターリャイ樹の
心地よい林に落ちる冷たい雨の音と、
列をなして［戻ってきた］小船に乗った［海の］狩人たちが、
海岸に［船を］引き上げる声と、
広大な塩田で「真っ白な塩」と叫ぶ者たち［の声］とが、
混じり合う。

Maturaikkāñci は「十の長詩」の中でも最長の 782 行からなる、古代パーンディヤ朝の首都マドゥライを称える作品である。しかし、作者はマドゥライのみならず、パーンディヤ国の山地（クリンジ）、牧地（ムッライ）、田園（マルダム）、そして海岸（ネイダル）の各々の地域、国の中心を流れるヴァイハイ川の様子なども描写する。上の部分はパーンディヤ国の海岸地域を描いた部分の一部であるから、したがって、それは領土であった東海岸であることは間違いない。また、上の描写が単なる詩人の詩的創作でないことは、その後の 131 ～ 138 行でヴァイハイ河口近くの商都コルカイ（Koṟkai）で真珠取りをする様子を描いていることから分かる[17]。

また、上の例ほど確かではないが、やはり東海岸の塩田に言及していると思われるのが *Pur.* 386 である。この作品は、英雄文学に多い王の恵み深さを描く作品で、王が詩人たちにたっぷりとギーのか

かった揚げた肉、焼いた肉、溢れんばかりのミルクをふるまうことを述べ、王のもとでは汗を流す仕事はこの熱い料理を食べることだけであると王の恵み深さを称え、そして王の領土を賛嘆する。以下は、その海岸部の描写である。

プンナイ樹の枝が打ち上げられている海辺で、
海上を風が運ぶ船の数を［娘たちは］数え上げている。
塩田では、白く小さな［結晶の］塩の値段を叫び、
大きな山岳のあるよき国［へ向かう］塩商人たちが喧しい。（*Pur.* 386:14-18）

この作品ばかりでなく、サンガム文学の個々の作品には、詞華集が編纂されたころか、あるいはその後につけられたと思われる、当該の作品の内容や背景を説明する添書があるが、その添書によると、この作品は詩人 Kōvūrkiḻār が、チョーラ王 Cōḻaṇ Kuḷamuṟṟattut Tuñciya Kiḷḷivaḷavaṇ を歌ったものである。もしもこの添書が正しいとするなら、この作品はチョーラ国を描いているのであるから、ここでの塩田も東海岸のそれである。

しかも興味深いのは、東海岸にいる塩商人が「高い山のある素晴らしい国」へ向かうとあることである。ここで、「高い山」とは 2000 メートルを超える山並みの続く西ガーツ山脈であるのは間違いないから、「素晴らしい国」とは、ケーララ地方を中心としたチェーラ国や山岳地帯を支配する幾多の族長の地域を示唆していると考えて間違いないだろう。もっとも、最初に述べたように、サンガム文学では、具体的な場所を念頭において作品を作っているとは限らないから、この作品から必ずしもチェーラ国を想起する必要はない。しかし、はっきりしているのは、この作品は東海岸に面する国から西方の西ガーツ山脈方面へと塩商人が赴いていることを示していることである。ここで「大きな山岳のあるよき国［へ向かう］塩商人たち」は注釈にしたがった解釈であり、原文を素直に読むと「大きな山岳のあるよき国の塩商人たち」となる。しかし、原文通りだとしても、遠く離れた大きな山岳のある国から塩を買い付けにきた塩商人が自国へ戻ると読めるから、注釈の読みでよいだろう。なお、塩商人は必ずしも海岸部に住んでいたのでないことは、*Nar.* 374 が塩商人の小さな村落が内陸部の荒地にあることを述べていることからも明らかである。

以上のように、東海岸部に塩田があり製塩がなされていたことを示す資料は存在している。しかし、西海岸部にのそれらに言及する作品はない。このことは、今日、製塩業はベンガル湾に面する東海岸すなわちコロマンデル海岸域が中心であり、アラビア海に面する西側のマラバル海岸では多湿のためにあまりなされていないことと符合する。[18]

5. 塩商人の通商ルート

このようにして得た塩を塩商人たちは荷車に積み、それを雄牛に曳かせて隊列をなして移動する。この隊商は相当大規模であったようで、*Ak.* 191 では、村全体が動いているようだと言う。彼らが通る道として描かれるのは、山地（*Nar.* 138, *Ak.* 310, *Pur.* 102, 116）または荒地である（*Kur.* 388, *Ak.* 119）。荷車の荷台は頑丈に作られて布で覆われ、車軸は太鼓のような太い丸木でできている（*Perumpāṇ āṟṟuppaṭai* 546 ff.）。[19] しかし、長旅と、塩商人をも恐れさせるような酷い道のため（*Pur.* 84）、荷車が壊れることもしばしばである。*Nar.* 138 を見てみよう。

塩商人は、塩田に育まれた塩の山のような荷を山地に運び、
［塩を売りに来たと］叫びつつひと所に留まることはない。
そして、壊れてうち捨てられた使い物にならない古い荷車の梁に
白い鷺が［巣作りをし］卵を産んでいる。（*Nar.* 138:1-4）

したがって、彼らはスペアとなる車軸を持っている（*Pur.* 102）。ときには荒地を進む隊商の牛も水も草もなく弱って死に、そのままうち捨てられることもある（*Pur.* 307）。山地では車輪がぬかるみにはまり、なかなか引き出せないこともあり（*Pur.* 60）、また、つぎの作品のように、川の中で流れにとられることもある。

酒を楽しんだあとでも、さらに酒をのむように、
彼女を愛したあとでも、［心よ］お前はさらに彼女を欲している。
大きな川の中で止まってしまった塩を運ぶ荷車が、
大雨に打たれ、塩が溶け［て、駄目にな］るように、
彼女のたわわな黒髪の手を加えていない美しさを見て［心を溶かし］。（*Kur.* 165）

これらの作品を見ると、塩商人たちは過酷な荒地を抜けたり、または険しい山地を超えて目的地に到達するように思える。すでに見た塩の産地からすると、たとえば、東海岸（コロマンデル海岸）のヴァイハイ河口近辺から、タミル人の多くが「荒地」と聞いたときに想起するマドゥライ東南方のラームナード地方を通り、マドゥライなどの都市を抜け、西ガーツ山脈の分水嶺にあたるペリヤール近くの峠を越え、ケーララのコーチンへ達する道などが想起される。

ちなみに、考古学では、東西を結ぶ古代の通商路として、北からパールガートを通るもの、上述のマドゥライ～ペリヤール～コーチンという道、半島を南に下がったティルネルヴェーリから西ガーツの低い部分を通る道、コモリン岬を迂回してケーララに入る道が確認されている[20]。では、たとえば今日でもタミルナードゥとケーララとを結ぶもっとも重要な交通路である、パールガートを通る塩の道は存在しなかったのだろうか。パールガートとは、タミルナードゥ州北西部の、西ガーツ山脈の山並みが切れ、狭いところでも 20 キロほどの平坦部となっている、東西を結ぶ交通路としてはもっとも便利と思われる地域である。しかし、サンガム文学には、塩の隊商がそのような道を通るというはっきりした記述は見当たらない。他方、広い幹線道路（原意「広い／大きな－道」: peru-vaḷi, neṭun-/perun-/ārppa-/viyaṉ-teru）の存在に言及する作品は 30 例ほどある（*Pur.* 30, *Perumpāṇārruppaṭai* 81 など）。

はじめに述べたように、サンガム文学はかなり様式化の進んだ文学である。塩の隊商に関して言えば、広漠たる荒地（パーライ）の描写は、そのまま恋人のいない女の寂寥感、孤独、寂しさを映し出すためのテクニックである（第 2 節で引用した *Kur.* 124 参照）。また、険しい山地（クリンジ）も女男の関係の厳しさを表している。たとえば上でみた *Nar.* 138 であれば、男（白い鷺）は女に愛を芽生えさせ（卵を産んで）ながら、まるで使い捨てられた荷車のように女を打ち捨てて省みない、ということを暗示している。つまり、恋による女の苦しみ、寂寞感を表すためのテクニックとして、険しい山地あるいは広漠たる荒地を通る塩の隊商を描くことが定型化・様式化したのである。反対に、幹線道路があったはずの田園（マルダム）や牧地（ムッライ）を描く場合には、それら各々のジャンルに適した情景を描くことが定型化し、塩の隊商は描かれていない。たとえば、男が遊女のもとに通うことによる愛の葛藤を主題とするマルダム・ジャンルの作品では、妻も息子もいる満ち足りた家庭があり、何も不足のない夫のはずなのにという女の思いを表すために、「肥沃な水田の畦［に植えられた］

マンゴーの木から熟して［自然に］落ちる甘い実を、周りの池のヴァーライ魚がくわえ去る」（*Kur.* 8）というように、労せずして欲しいものが手に入る豊かな町を描くことが定型化している。
このように、サンガム文学は必ずしも現実をそのまま描いているわけでもないし、タミル古代社会の実際の姿のすべてを描き出しているのでもない。このことを考慮に入れると、実際には、塩の隊商がパールガートのような幹線道路を往来することの方が、むしろ多かったのではないだろうか。

6. おわりに

近年、筆者の関心は、タミル古代の社会を知ることに向かっている。タミル古代文学であるサンガム文学には、さまざまな社会集団（職業集団）が描かれている[21]。本稿では、それらのなかでもよく描かれる塩商人に焦点を当て、一般に文献学では研究の対象としない塩の産地、塩を運ぶルートなどを考察してみた。

では、なぜそれほど塩商人が描かれたのであろうか。塩商人が表れる頻度で言えば、荒地の住民の一種である maṟavar や牧夫 iṭaiyar の半分から 3 分の 1 程度である。ただ、maṟavar や iṭaiyar の描き方は定型化していて、彼らの生活、習慣、服装などの詳細を描かない。それに対して、塩商人ではそれらがたびたび描かれている。すでに述べたように、塩商人の隊商はかなりの規模で、見ものであったことが窺われるし、また、第 4 節でみた 2 作品をはじめ、塩商人が塩の値段を叫び物々交換する様子もしばしば描かれる。これらのことからも、塩商人の到来と塩の売買は一種の風物詩であったように思われる。つぎの作品も、そのことを暗示する。

自分の土地で取れた白米を売り
他の土地で塩の買値を告げて買い取り
塩商人たちが、そこに長逗留するのを嫌がる仲間とともに
長い列をなす荷車で、月の砂浜を越えて
去っていくことですら、寂しく悲しいもの。（*Nar.* 183:1–5）

それなのに、淋しい夕暮れにあなたはいてくれないと女が嘆いているのである。

この作品はまた、塩商人が、他の地方のニュースや情報をもたらすものであり、さらには、宮本常一の言う[22]、世間師―世間を広く見聞し経験豊かな者―のような存在であったことも暗示している。しかしながら、風物詩としての存在、あるいは世間を知り、ニュースをもたらす存在としては、吟遊詩人を含めた旅芸人なども、塩商人に勝らずとも劣らぬ存在であったはずである[23]。それにもかかわらず、古代の作品で、旅芸人が村などで芸を披露していたかどうかについて、述べる作品はない。彼らを描く作品では、彼らがひどく貧しく、恵深い王によっていかに救われたかを述べるのみである（第 4 節の *Pur.* 386 の解説参照）。

文学を研究するにあたって、われわれはややもすると、なにが描かれているかにのみ関心を向けがちである。しかし、当該文学の特徴は、なにが描かれていないかということにもあることを、この塩商人の事例は示している。

略語表

Ak. *Akanāṉūṟu.*「八詞華集」のひとつで、13～31行の恋愛詩400からなる。

DEDR *Dravidian Etymological Dictionary* (Second Edition), by T. Burrow and M. B. Emeneau.

Kur. *Kuṟuntokai.*「八詞華集」のひとつで、4～8行の恋愛詩400からなる。

Nar. *Naṟṟiṇai.*「八詞華集」のひとつで、9～12行の恋愛詩400からなる。

Pur. *Puṟanāṉūṟu.*「八詞華集」のひとつで、様々な長さの英雄詩400からなる。

参考文献（二次資料のみ）

1. Aiyangar, M. Srinivasa, *Tamil Studies, or Essays of the History of the Tamil People, Language, Religion and Literature,* Guardian Press, Madras, 1914: reprint, Asian Educational Services, New Delhi, 1982.
2. Burrow, T. and Emeneau, M. B., *A Dravidian Etymological Dictionary* (2nd ed.), Clarendon Press, Oxford, 1984.
3. Chelliah, J.V. (tr.), *Pattuppattu: Ten Tamil Ldylls,* The South India Saiva Siddhanta Works Publishing Society（以下S.I.S.S.W.P.S.と略), Madras, 1962.
4. Hart, G. L., *Poets of the Tamil Anthologies: Ancient Poems of Love and War,* Princeton University Press, Princeton, 1979.
5. Hart, G. L. & Heifetz, Hank, *The Four Hundred Songs of War and Wisdom: An Anthology of Poems from Classical Tamil: The Puṟanāṉūṟu,* Columbia University Press, New York, 1999.
6. Iyengar, P. T. Srinivas, *History of the Tamils: From the Earliest Times to 600 A. D.,* Asian Educational Services, New Delhi, 1982 (reprint; 1st ed., 1929).
7. Kanakasabhai, V., *The Tamils Eighteen Hundred Years Ago* (reprint; 1st ed., 1904), S.I.S.S.W.P.S., Madras, 1966.
8. Nayagam, Xavier S. Thani, *Landscape and Poetry; A Study of Nature in Classical Tamil Poetry,* Asia Publishing House, Bombay, 1966.
9. Pillai, M. Shanmugam and Ludden, David E. (tr.), *Kuṟuntokai—An Anthology of Classical Tamil Love Poetry,* Koodal Publishers, Madurai, 1976.
10. Pillay, K. K., *A Social History of the Tamils,* Vol. 1, University of Madras, Madras, 1975 (2nd ed.; 1st ed., 1969).
11. Ramanujan, A. K., *Poems of Love and War, From the Eight Anthologies and the Ten Long Poems of Classical Tamil,* Columbia University press, New York, 1985.
12. Subrahmanian, N., *Pre-Pallavan Tamil Index: Index of Historical Material in Pre-Pallavan Tamil Literature,* University of Madras, Madras, 1966.
13. Subramanian, A.V. (tr.), *Narrinai* (*An Anthology of Amour*), Department of Tamil Development-Culture, Government of Tamil Nadu, Printed by Tamil University Press, Thanjavur, 1989.
14. Takahashi, Takanobu, *Tamil Love Poetry and Poetics* (*Brill's Indological Library* No. 9), Leiden/New York/Köln, E. J. Brill, 1995.
15. *Tamil Lexicon,* 6 vols., University of Madras, Madras, 1926-1936; *Supplement,* 1938; Reprint, 1982.
16. Zvelebil, K.V., *Tamil Literature* (*Handbuch der Orientalistik, Zweite Abteilung, 2. Band, 1. Abschnitt*), E. J. Brill, Leiden, 1975.

註

＊本稿は、平成9年度～平成11年度科学研究費補助金（国際学術研究、研究代表者：水島司）研究成果報告書である『南インド・タミル地域の社会経済変化に関する歴史的研究』(2000年、137―146頁）に収録されていたものをもとに、その後に得た新たな情報等を加味して、大幅に書き改めたものである。

(1) タミル古代の作品群を総称してしばしばサンガム（Caṅkam, Sangam）またはシャンガム（Saṅgam）文学と呼ぶが、人によってそれの指す内容が違い紛らわしい。最も広義には、(1)「八詞華集（*Eṭṭuttokai*）」と「十の長詩（*Pattuppāṭṭu*）」とのいわゆる二大詞華集、(2) 文法書『トルハーッピヤム（古き文典、*Tolkāppiyam*）』、(3) 箴言集を中心とした「十八小品（*Patiṉeṇkīlkkaṇakku*）」、それに (4) ジャイナ教叙事詩『シラッパディハーラム（踝飾物語、*Cilappatikāram*）』と仏教叙事詩『マニメーハライ（宝石の帯、*Maṇimēkalai*）』との二大叙事詩の全てを指す。一方、(3) と (4) とは年代が多少降ることからサンガム文学に含めない論者もいる。最狭義には (1) の二大詩華集のみをサンガム文学とするが、それは (1) と (2) とがほぼ同じ年代に属すると言っても、両者が実際の文学とその規範書というように全く性格を異にするからである。本稿でも、(1) の二大詩華集のみを以下サンガム文学と呼ぶことにする。

そのサンガム文学であるが、3～782行の2380余の詩篇からなり、それらの詩篇は男女の愛を主題にする恋愛文学と王や族長の戦いや英雄行為などを主題とする英雄文学に二大別される。このうち恋愛文学は全作品の約8割を占め、残りの2割が英雄文学で、両文学ともに様式化されているが、ことに恋愛文学では様式化が進んでいる。

(2) 参考までに、塩、塩田、塩商人などを表す語を挙げておく。見出し語の次の番号はDEDRの項目番号である。

1. **aṭṭ-uppu** (76) salt produced by evaporation.

2. **aḷam** (299) saltpan, maritime tract, saline soil, sea; **aḷakkar** sea, ocean, saltpans; **aḷavar** persons belonging to the caste of

salt manufactures.

3. **kaḻi** (1359) backwater, shallow sea-waters, salt river, marsh, saltpan.

4. **kāyal** (1463) backwater, lagoon, mouth of an ebbing stream, salt-pans.

5. **kār** (1466) to be pungent, acrid, hot to the taste, be very saltish or brackish; **kārppu** pungency, saltness; **kari** to be saltish to the taste, ...

6. **kāṇal** (1508) seashore, salt marsh, saltpan, saline soil, gravelly soil.

7. **uppu** (2674) (a) salt, alkali, saltness; **uppar** salt manufactures; **uppaḷam** salt-pans, saline land (cf. 299 **aḷam** salt-pan); **uppaḷavaṉ** salt-maker; **uvaḷakam, umpaḷam** salt-pan; **umaṇaṉ** salt-maker, dealer in salt; fem. **umaṇatti.** (b) **uvar** to taste saltish, be brackish, taste astringent, dislike, abhor, loathe; n. saltishness, brackishness, salt, brackish soil, fuller's earth, sea, pleasantness (= Skt. lāvaṇya-); **urarppu** saltishness, astringency, dislike, aversion; **urari** brackish water, urine, sea.

(3) そのような例外として、*Kur.* 166 を挙げることができる。この作品では、恋人のいない寂しさを、女がつぎのように歌い上げる。

冷たき海の逆巻く波が［魚を］混ぜ返すと、
翼の白い鷺が列を乱して、アイライ魚を捕える。
［そのような］すばらしい町である、［われわれの］マランダイの町は！
でも、たった一人でいれば、寂しさに打ちひしがれる。

マランダイ（Marantai）とは、歴代のチェーラ王を称えた詞華集 *Patiṟṟuppattu.* 90:28 にも描かれるチェーラ国の海岸部の都市であるから、西海岸、すなわちケーララ地方の海岸都市であることは間違いない。

(4) これら 5 つの名称の起源については議論があるものの、それら個々の地域に固有の、あるいはその地域を代表する花ないしは植物の名称が、後にそれらの土地をも表すようになったと考えられる。

(5) 参照、Nayagam, *Landscape and Poetry*, pp. 75 ff.

(6) *DEDR* では、中間を表わす it.ai と牧人の it.aiyar とを語源的に結びつけず、項目を別に立てている。参照 *DEDR* 448, 450.

(7) pariṉpaṭal という韻律で書かれた 4 ～ 5 世紀の作品で、元は 70 詩あったと思われるが、現存するのは、32 ～ 140 行からなる 22 詩だけである。

(8) kīḻ については *DEDR* 1619 を、mēl については同 5086 を参照のこと。

(9) *Porunarāṟṟuppaṭai* は「十の長詩」のひとつで 248 行からなる。すでに恵み深い王を訪れた戦争詩人（porunar）が他の戦争詩人に、その王や王国の様子を説いて王のもとへ誘う、いわゆる「案内文学」（ārruppat.ai）のひとつである。

(10) *DEDR* 3852 参照。

(11) paṭu には「現れる」という意味もある。*DEDR* 3853 参照。

(12) *Ak.* 140:3, 140:7, 159:1, *Nar.* 4:8.

(13) インドの岩塩は、薄いピンク、薄い茶色、そして薄い白色または透明であり、「白」と形容するようなものではない。

(14) 付加価値の高い物の移動の記録は、古代からさまざまなものがある。しかし、それほどのものではないものの輸送ではっきりしているものとしては、はるか後代の 17 世紀のデリーで、1700 キロほど離れたウズベキスタンから運ばれた、りんご、なし、ぶどう、メロンなど、かなりの量の果物が供給されていたことが分かっている（ベルニエ著・関美奈子訳『ムガル帝国誌（一）』、岩波文庫、165 頁）。

(15) 米と塩との物々交換は他の作品でも描かれる。たとえば、先の *Nar.* 254、また *Nar.* 183 など。本稿では商取引については深く論じないが、古代南インドでどの程度貨幣経済が進んでいたのか、物々交換はどの程度行われていたのかなどについては、稿を改めて論ずるつもりである。

(16) *DEDR* 1355 参照。

(17) パーディヤ国の海の都コルカイの真珠は有名で、紀元後 1 世紀に「ヒッパロスの風」と呼ばれる貿易風が発見されるとともに盛んになるローマ交易での、インドの側からの重要な輸出品のひとつであった。真珠は、インド東海岸のコルカイとセイロンとの間の狭い海域マンナール湾で素潜りで取られていた。しかし、天然の真珠であるために粒の大きさや形が一定しないという欠点があり、19 世紀末に御木本幸吉（1858-1954）により養殖真珠が作られるようになると、大きな打撃を受けることとなった。

(18) インドのように、熱帯地方に属し、周りを海に囲まれていれば、どこででも製塩できそうだが、今日、インドの海塩の生産は、西海岸に面した北インドのグジャラート州とマハーラーシュトラ州、南に下ったカルナータカ州、および東海岸北部のオリッサ州、南に下がったアーンドラプラデーシュ州、タミルナードゥ州などであり、これらのうちグジャラート州がインド全体の 70%、ついでタミルナードゥ州が 15% の生産高を誇る。なお、タミルナードゥ州で、現在塩田があるのは、ポンディチェリーの南郊、さらに南に下ったナーガパッティナム、さらに南のトゥートゥクディなどである。

(19) *Perumpāṇārṟuppaṭai* は「十の長詩」のひとつで 500 行からなる。注（9）で述べた「案内文学」で、ここでは恵み深い王を訪れた詩人（pāṇar）が他の詩人を誘っている。

(20) タミル大学名誉教授で、現ポンディチェリー・フランス研究所研究員の刻文学者 Y. Subbarayalu 氏による。

(21) それらの社会集団は、たとえば、王を朝目覚めさせる一種の吟遊詩人 akaval（*DEDR* 10）、塩商人 umaṇaṉ（*DEDR* 2674（A））、牧人 iṭaiyar（*DEDR* 450）、太鼓たたきの iyavaṉ（*DEDR* 470）や tuṭiyar（*DEDR3297*）、農耕民 uḷavar（*DEDR* 688）、荒地の狩猟民 eyiṉ（*DEDR* 805）、踊り手の一種 kūttar（*DEDR* 1890）、鍛冶屋 kollar（*DEDR* 2133）、大工 taccar（< Sanskrit takṣa）、漁民 paratavar（*DEDR* 3957）、paṟai ドラムをたたく低階層の paṟaiyar（*DEDR* 4032）、戦争詩人 porunar（*DEDR* 4540）、荒地の住民の一種 maṟavar（*DEDR* 4763）、タミル地域の北部に隣接する地の住民 kōcar（*DEDR* 2177）や vaṭukar（*DEDR* 5218）、山地の狩猟民 vēṭar（*DEDR* 5527）、踊り子の一種 viṟali などである。

(22) 宮本常一『忘れられた日本人』、岩波文庫版、1984 年、214、259 頁など。

(23) インドよりはるかに資料の残るヨーロッパ中世の旅芸人を扱った研究では、「歌や弦楽器の演奏、アクロバティックなあるいはエロティックなダンス、もしくは両方のダンス、ダンス音楽、マリオネット、道化芝居、魔法、調教、さらに、一連のニュース、情報、うわさ話、奇跡物語、センセーショナルな報告など、これらすべてを旅芸人は提供できたし、これらすべてが観衆に喜ばれ、熱狂的に受け入れられた」（ヴォルフガング・ハルトゥング［著］井本日向二 / 鈴木麻衣子［訳］『中世の旅芸人　奇術師・詩人・楽士』、法政大学出版局、2006 年、143 頁）と述べている。